

平成19年度 大学院工芸科学研究科 秋入学宣誓式
学長告辞

本日、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科に入学された博士前期課程十五名、博士後期課程九名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心から歓迎の意を表します。今日、研究者、高度技術者を志向する若い新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、大きな喜びであります。

皆さんは、学部や博士前期課程で身に着けた知識や能力をもとに、これから、本学大学院においてより高度な研究に取り組まれることになります。そこで、まず、本学の特色と基本理念の中で謳っている教育研究の指針を紹介させていただきたいと思います。

京都工芸繊維大学の特色は、伝統文化の源である古都の風土の中で、知と美と技を探究する独自の学風を築きあげ、学問、芸術、文化、産業に貢献する幾多の人材を輩出してきたことにあります。その歴史を踏まえ、社会的な要請に応えて更なる発展をする礎としてつぎの三つの指針を掲げています。

第一は、「人類の存在が他の生命体とそれらを取りまく環境によって支えられていることを深く認識し、人間と自然の調和を目指す」ことです。第二は、「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」ことです。第三は、「社会に福祉と安寧をもたらす技術の必要性を深く認識し、豊かな人間性と高い倫理性に基づく技術の創造を目指す」ことです。

本日入学された皆さんには、この教育研究の指針をよく理解し、これからの本学での研究活動の指針としていただきたいと思います。

そこで、入学された皆さんに理念に謳っている指針をより深く理解していただくために、理念の背景になっている社会的状況についてお話したいと思います。

現代は、人々の抱く価値観が多様に変容し、価値多様化時代と言われています。価値観は、世界の各地域で異なり、時間軸で大きく変容します。この多様化の傾向は、益々強くなっています。二十世紀後半から怒濤のように押し寄せてきたグローバリゼーションは、地域による価値観の違いを減少させる世界共通化概念ですが、価値観の多様化の進行を止めるものではありません。

価値観が変容し、多様化するのは何故なのでしょう。この問題の理解を助けてくれるのが、イングルハート（Inglehart）のカルチャーシフトという概念です。この概念は、心理学者のマズロー（Maslow）の欲求の段階説にその基礎を置いています。

マズローの欲求の段階説では、個々の人間の欲求が発達的に変化していくことが述べられています。生まれた初期の段階では、生存と安全を得るための、飢え・渇き・排泄などの生理的欲求が主要で、幼児期の行動はこの欲求に規定されるとしてます。そして、成長するに従って、自己実現を求める社会的欲求（協調、競争、優越、承認、不安）が獲得されますと、行動はこの社会的欲求に規定されるようになっていきます。イングルハートは、マズローの主張する、個人のこのような欲求の段階的変化が、人類全体の欲求・価値の変化にも対応するのではないかと考え、それを実証するために、世界価値観調査（World Values Survey）を、世界六十ヶ国以上で、世界人口の七十五%に相当する人々を対象として、何年間にもわたって行いました。そして、その結果を「価値の変容（Culture shift in advanced industrial society）」として発表しました。日本でも

「静かなる革命」、「カルチャーシフトと政治変動」といった訳本として翻訳出版されています。調査によって明らかになった価値の変容の内容は次のようなものです。

人類が、欠乏と戦争の危機を経験している段階（産業化以前）では、生存のための「物質と安全」を優先する物質主義的価値観をもちます。産業が発展するに伴い、人々の平均寿命は延び、幸せ感・満足度は高まってきます。それがある点を越え、繁栄と平和の脱産業化の段階になりますと、「帰属・尊厳・自己実現」を優先する脱物質主義的価値観へと変容します。この価値の変容（Culture shift）に伴い、「経済成長」から「環境保護」へ、「経済的問題」から「文化的問題」へ、「異質性の拒絶」から「異質性の寛容」へ、「効率」から「意味」へ、「官僚制組織による管理」から「個人の自立性に基づく管理」へと重要性が移行するのです。イングルハートの調査では、先進国での物質主義者と脱物質主義者の比率は、一九七〇年代では四対一、一九八〇年から九〇年代では四対三、それが二十一世紀になって一対一となり互いに拮抗するようになりました。それに伴い、世界における対立の構造が変化し、一九七〇年代の「財を如何に分配するのか」というイデオロギーの対立が、物質主義と脱物質主義に基づく対立へと変化したというのです。

日本の内閣府が継続的に実施している「国民生活に関する世論調査」によりますと、「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」という「心の豊かさ」を重視する人の割合が、年々増加しているという報告がされており、日本においても、物質主義から脱物質主義への価値の変容が明らかです。

しかし、この価値変容の実態は、地域によって度合いが異なります。脱物質主義の進展は先進諸国に限られており、発展途上国では物質主義が主流です。そのため、物質主義と脱物質主義に基づく対立が、世界レベルで起こっています。また、国のレベルでも、経済的に安定している人々とそうでない人々との間で、社会的強者と弱者の間で対立が生じ、また、高齢者の福祉をめぐる世代間戦争といわれる対立が起こっているのです。世界の国々で、また、国内のいたるところで、価値観の変容が起こり、政治・経済・社会の再編がおこっているのが、現在の状況なのです。

物質主義のもとでは、自然、事物、身体は、人間の精神に対する外在的、物理的で操作的な対象として捉えられ、人間は、これらの存在の性質を抽出、純化、抽象化、操作することによって科学技術として利用してきました。そして、その結果として、科学・技術の発展があり、人間の文明と文化が発展してきたのです。物質主義を支えてきた、人間と自然、物質と精神、主観と客観という二元的自然観・科学観・世界観が、デカルト以来、永く我々の文化を推し進めてきたのです。

しかし、科学技術の進歩は、その半面で地球環境問題、エネルギー問題、人口問題、富の南北間格差、都市問題、宗教の対立、さらに、急激なグローバル化と情報化に付随する様々な混乱・衝突など、従来の考え方では、対処できない新たな問題群を我々に突きつけています。

このような問題群に立ち向かい、地球規模での危機的状況を打開・克服するためには、新たな自然観・科学観・世界観に基づく新しいパラダイムの構築が必要です。このパラダイムは「自然と人間の共生」と「人間相互の共生」という理念を希求し、「持続的社会的構築」という課題に応えるために「総合」を指向するものでなければなりません。

本学は、このような社会状況の中で、「人間と自然の調和」、「知と美の融合」、及び「豊かな人間性と高い倫理性に基づく技術の創造」を目指すことを教育研究の指針とすることを理念に掲げたのです。

本日入学された皆さんには、この本学の理念に示されている教育研究の指針と、またその背景にある地球レベルでの社会的動向と社会的要請を十分に認識され、それぞれの課題の探求を通して、生涯に亘って創造的な仕事を可能とする礎を築かれることを希望します。

皆さんの大学院生活が実り多いものであることを期待して私の式辞と致します。

平成十九年十月二日
京都工芸繊維大学長
江島義道